

## 命の大切さを伝える

新松戸南中学校 1年

鈴木 辰長

私は平和大使長崎派遣を通して平和の大切さや命の尊さを学びました。長崎の景色を最初見た時、綺麗な青空と美しい街並みがありました。でもこの幸せな毎日が80年前の8月9日に奪われてしまった、その光景を想像するととても悲しかったです。

平和大使長崎派遣を通して印象に残ったことが二つあります。

まず一つ目は、二日目に訪れた原爆資料館です。原爆資料館には目を疑うような展示がたくさんありました。熱線の影響で肌がただれている少年や黒焦げになってしまった子供、放射線の影響で一部が原爆ケロイドとなっている男性の写真など原爆の威力がどのくらい悲惨なものだったのかと思い、胸が痛くなりました。

さらに、永遠に11時2分で止まっている時計や被爆前後の長崎の町を比べている物など、原爆が投下され、自分の大切な物が奪われてしまったという事実と向き合いながらもその事実を語る被爆者の勇気が伝わりました。そしてこのようなことが80年前の8月9日にあったのかと思うと二度とこんなことはしてはいけないと強く思いました。

次に私が印象に残ったことは、青少年ピースフォーラムに参加したことです。青少年ピースフォーラムでは、被爆体験講話や被爆疑似体験・違いとは何かについて考えることなど様々な体験をして、平和の大切さや命の尊さをより深く学びました。

被爆疑似体験では、自分の大切な物や人をカードに書き、実際の戦争を体験しました。

空襲警報や徴兵令など戦争が激化していく中で大切な物や人を書いたカードがどんどん失われていき、最後は何もなくなってしまいました。私はこのことを体験し、とても悲しくなりました。さらに被爆疑似体験では、光や音を使って当時の状況を再現していました。急に暗くなったと思ったら光とともに大きな音がしてとても恐怖を感じました。しかし被爆をした当時の人たちは被爆疑似体験では表せないぐらい怖い思いをしていると思うと、核兵器を二度と使ってはならないと思いました。

被爆体験講話では被爆者の一人である三瀬清一郎さんの話を聞きました。三瀬さんは当時 10歳で爆心地から3, 6キロの屋内で被爆しました。三瀬さんを含む家族8人は無事でした。しかし、三瀬さんの当たり前だった生活は一瞬にして奪われてしまいました。

空襲が相次いでおこっていた時や戦争が激化してきた時は夜なども安全に過ごせる日々は少なかったそうです。私に置き換えてみるとありえない事だったので驚きました。でも今を生活している私たちは安全に生活もできるし、安全に眠れるところだってあるし、ご飯も食べられます。今までは普通に寝ていた夜や平和な毎日は当たり前のように当たり前ではないことがわかりました。三瀬さんは「平和は人類共有の世界遺産です。」とおっしゃっていました。私は誰もが平和を望んでいると思います。

三瀬さんの話や原爆資料館・青少年ピースフォーラムなどを通してこの世界を平和にするにはまず初めに「価値観の違いを認めて、互いを尊重しあうこと」が大切だと学びました。

年々被爆者の方たちの年齢層は上がってきて、今年で平均86歳に達しました。そして、原爆の悲惨さや命の尊さを語れる被爆者の方々は減ってきています。

しかし、核兵器という兵器によってたくさんの人たちの命が奪われた記憶は風化させてはいけないと思います。だからこそこのような貴重な経験をさせてもらったことを忘れずに当たり前ではない一日一日を大切にしてください。たくさんの人たちに伝えていきたいです。